

不自然さがないことの驚異

—ジョーという名のロジック 隠された論理—

01

金子 格 (東京工芸大学)



もし映画化し予告編を作るなら

まずこの場面だろう。「ホテルの内部の部屋が映って、ローリンがベッドに横たわっているではないか。…暑い日だから彼女はできるだけ涼しくしようとしていた。あの格好なら暑いわけがない」

数ある SF 作品でも最も恐ろしい場面だ。何が恐ろしいかって？ それはのちほど。

ネットワーク社会の予見

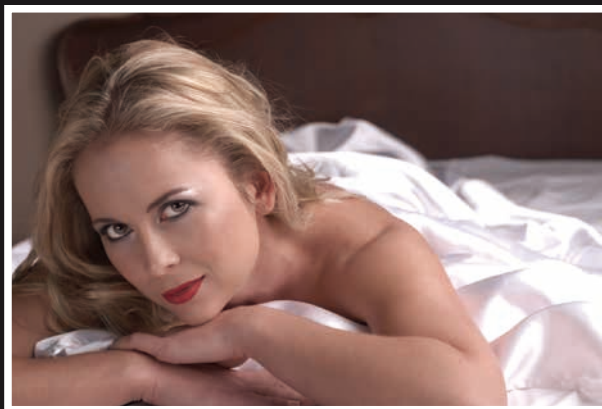
本作にはさまざまな見どころがあるが、第1はネットワーク社会を驚くほど正確に予見していることだ。「ロジック」とは本作品が描く未来社会で世界中の情報にアクセスできる情報端末のことだ。ロジックとその情報システムについての説明の要点をたどってみよう。

「諸君の家庭にもロジックがあるだろう。…途中省略（以下同）…カーソン回路のあるタンクにつながっている。…タンクというのは過去の番組の全記録と、森羅万象のあらゆる事実をつめこんだ、でかいビルディングのことだ。…なんでも知りたいこと、見たいことがあったら、キイを叩けば教えてくれる。…計算はしてくれるし、簿記はしてくれるし、…『失恋者への助言』とキイを叩けば失恋に対する助言もしてくれるしだいだ」

ロジックをタブレット端末、カーソン回路をブロードバンドルータ、タンクをデータセンタと読み替えば、ほぼ現代のネットワーク社会の説明として違和感なく読むことができる。

不自然さがないことの驚き

しかし、多くの読者は私と同じ衝撃を感じるこ



解説者によるローリンの想像図（原作にはこの図はない）

はないだろう。読んだ時代が違うからだ。

本作品が書かれたのはかなり昔だ。Windows 95 が登場した 1995 年？ いやいやもっと昔。Tim が Next コンピュータを使って CERN で最初の Web サーバを稼働させた 1989 年^{☆1} だろうって、甘い甘い。フランスでミニテルが開始された 1982 年よりも古い。いやいやいやいやいやいや…、実をいえばさらに 40 年近く以前の 1946 年である。我が国が竹やりで原子爆弾の国と戦い、ペンシルバニアではコンピュータの球切れした真空管をせっせと交換していた時代だ。

私が本作品を読んだのは 1970 年ごろでまだ中学生だった。当時の感想を正直に告白しよう。「いやぁ愉快だがデタラメな話だなあ。コンピュータは 1 台数億円。秒刻みで高額の使用料を取るんだぜ。テレビ信号が電話線を通るはずもないし。だからデタラメっていいけれど面白い」。やがてパソコン、インターネット、Web サーバ、ブロードバンドが登場するとは当時誰も想像していなかった。

作品中の人々はロジックに依存している。仕事、娯楽、通信のすべてをロジックに頼る。ロジックの

☆1 1989 年に CERN（欧州原子核研究機構）の Tim Berners-Lee が Next コンピュータ上に世界初の Web サーバを稼働させた。

提供するサービスは猥雑さを極める。こうしたネットワーク社会の猥雑さは現代の我々から見て何の不自然さもない。

しかし、作品が描かれた時点でネットワークのかけらもなかったことを考えると、ロジックが実現した社会の描写に何の不自然さもないことこそが、本作品の驚きである。

ローリンが象徴する恐怖

そろそろローリンに再登場願おう。SF 作品で主人公を襲う恐怖はさまざまだが、ローリンは変身する新生物でも、宇宙人でも、殺人口ロボットでもない。正真正銘、ホモサピエンスの（完璧な肉体を持つ）女性であり、ロジックのスクリーンから主人公にやさしく微笑む。「あたし、すごくさびしいのよ。早く来てね、ダッキー！ 飲み物を用意して待っているわ」。

どうして主人公は「死ぬほどおそろしいよ」とおびえるのか。若い諸君が理解できなくても当然だ。中学生の私も分からなかった。歳をとればいずれ分かることである。

SF 小説に大の大人が本気で怯えることはあまりない。しょせんおとぎ話だ。しかし本作品に描かれたこの恐怖はあまりにリアルだ。

そしてローリンはネットワーク社会に生きる我々が現実と直面しているさまざまな恐怖を象徴している。技術自体は強力ではあるが中立である。恐ろしいのはそれを使う人間の限りない無分別さと欲望だ。ある者は麻薬の合成方法を探し、ある者は飲食店の冷蔵庫に入る自分の自画像を撮り、ある者は事実無根の警告を拡散する。

こうして、大衆の衝動と欲望が解放され、津波のように社会を飲み込み、我々が愛した平穏な社会がゆっくりと根底から崩壊していく。その恐怖を、作者はローリンを通じて描いているのだ。

隠された論理

なぜ作者が 70 年前にこれほど正確に現在のネッ

トワーク社会の姿を描くことができたのだろうか。この問いに正解はないが、面白い問題なので読者自身に考えてほしい。「作者はタイムトラベラーである」という陳腐な回答に逃げず、ぜひ論理的に推理してほしい。

技術の進歩を予測することは可能だ。

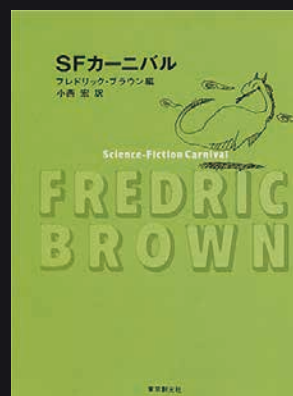
Gordon E. Moore は 64 個のトランジスタが集積された時点で、10 年後に 64,000 個のトランジスタが集積可能になると想像した。しかし本作品はそれよりはるか以前に書かれているから作者が将来の技術進歩を予測したとは考えにくい。

歴史は繰り返すから、歴史上の事件を未来に置き換えた話を作ることは可能だ。たとえば Isaac Asimov のファウンデーションシリーズは、ローマ帝国興亡史に題材を得たといわれる。しかし本作品はおそらく史実や古典作品をなぞったものではない。

関心を持った読者は 1946 年当時どのような技術が一般家庭に普及しはじめたかを確認することをお勧めする。その後の推理は読者にゆだねることしよう。

それにしても、本作品の先見性は見事である。技術は進歩しても人間の本性は意外に変わらない。はるか未来、想像を絶する技術が実現したら、人類社会のありようはどう変わるのだろう。この作品の作者同様人間のちょっとした観察眼があれば、意外に正確に予測できるかもしれない。

(2015 年 3 月 30 日受付)



本作品が収録されている『SFカーニバル』（創元 SF 文庫）フレドリック・ブラウン（編集）、小西宏（翻訳）、東京創元社 ディレクション&イラスト：吉永和哉、装幀：田中久美子+WONDER WORKZ。

金子 格（正会員） | Itaru-k@acm.org

東京工芸大学工学部コンピュータ応用学科准教授。博士（工学）。EIP 研究会主査、SC 29/WG 11 システム小委員会主査。空間的オーディオ信号処理等に取り組む。